

信州大学の教育の質保証について

令和元年 11 月 20 日 第 197 回教育研究評議会承認

【質保証システムの構築の背景】

少子化や大学全入といった社会的変化や、産業社会で求められる人材像の変化を背景として、いわゆる「学士課程答申」（2008 年）「質的転換答申」（2012 年）「3 つのポリシーガイドライン」（2016 年）によって打ち出されたのが、以下の 3 つの方針でした。

- 教授から学習への転換（学生中心主義への転換）
- 学生の能動的・主体的学びの推進
- 学修成果重視への転換

これらが、大学と大学教員が数年来取り組んでいる課題であり、この 3 点を満たすための教育改善や成果測定が実際に行われているか、そして、内部でそれらの評価・検証システムが構築され、機能しているかが、認証評価において審査されることになりました。それはつまり、信州大学がこれまで取り組んできた教育の良さをエビデンスに基づいて証明し、社会に示すということです。

これに対応するため、本学でも「信州大学の教育の質保証システム」を構築し、それを概念図によって示すことになりました。本学は、大学 DP と CP をよりどころとして、教育の充実と学修成果の向上を目的とし、同時に社会に対する説明責任を果たすため、次の考え方で教育の質保証のためのシステムを構築してきました。

【誰が質保証を担うのか】

信州大学の教育の質保証を担うのは、部局・教員・学生の三者です。部局や教員がどれだけ素晴らしい教育を提供したとしても、学生が学ばなければ、あるいは、そこで学んだ知識・技術を身に付けて使えるようにならなければ、大学は教育成果を上げたとは言えません。そこで、授業で①教員が何かを教えたならば、今度は②学生が努力して学ぶことが必要であり、その結果、③学生がどの程度身に付けたかを点検するという作業が、質保証には決定的に必要になります。

「教授から学習への転換」は、①の、教員が教える活動に直接かかわるものです。これにはたとえば、一方的な講義から双方向的な授業にしたり、授業外学習を組み込んだりするという改善行動が求められます。一定の内容を確かに教えているということも含めて、それを外部に証明する第一の手段には、シラバスが使われます。

「学生の能動的・主体的な学びの推進」は、②の、学生の実際の学習行動や努力にかかわるものです。これは、教員が授業を周到に計画して実施し、学生にがんばって勉強してもらうということを意味します。これを外部に証明する手段のひとつは、学生の授業外学習時間を示すことです。授業外学習が質を伴ったものである必要があるため、授業の達成目標と合わせて授業外学習の内容が検討される必要があります。次の「学修成果重視への転換」とも関連しますが、ここで意識すべきことは、個々の授業の場合、成果を出すのは15週後である（卒業後ではない）ということです。15週後に、シラバスで設定した到達目標に学生が到達することができるように、到達可能な目標と、15週間の道筋がデザインされる必要があります。

「学修成果重視への転換」は、教授・学習の結果、③実際に学生が知識・技術を身につけたのかどうかを確かめ、証明していく作業です。これを直接示すことができる指標が、成績です。学生の努力が適正なもので、質を伴ったものであったかどうかは、成績に反映されます。学生は、自分の努力が適切なものであるか、理解が求められる水準に達しているかを確認しながら自身の行動を15週にわたって調整していくことになります。そのためには、学期中、複数回達成度を確認する作業が必要であり、その達成度が学生にフィードバックされなくてはなりません。それによって、学生は、これだけの努力と理解度・習得度であれば、これくらいの成績になるということを理解していきます。この「成績評価の透明性」を確保することで、最終成績（＝学修成果）は、教員・学生ともに納得のできるものになります。

信州大学では、この3点の関連付けと点検を、教員個人のレベルでも、部局のレベルでも、大学全体のレベルでも行えるように、質保証システムを構築しました。

そして大切なことは、これを大学の外にいる第三者に納得してもらわねばならない、ということです。大学の内部でシステムを機能させ、外部に見せて信州大学の教育に対する信頼を得る、この2つを同時に解決することも、このシステムは狙っています。

【教育の質と質保証システムを担保するしくみ】

学生が確かに学んだということを、第三者にどのように証明することができるのか、これが質保証システムの要になります。それぞれの評価項目につき、何らかの指標を使う場合、その指標が「妥当であり、信用しても良いとみなせる」ということを示す必要があります。それがそれだけで信用されるものであれば問題ありませんが、多くはそうではありません。その場合は、「他の指標でその妥当性を担保する」という方法をとります。

成績を妥当な指標として信ぴょう性のあるものにするには、成績を出す手続きが正当でなければならない、その前提となる授業の量と質、学生の学びの量と質が妥当であるということが示される必要があります。そのため、教育の質保証に向けて、教員レベルで取り組み、

組織として部局レベルでも取り組むことになります。

本学では、教育の成果を示すのに成績で代用する（表示形式としては GPA で代用すること）にしていますが、この成績がなぜ成果指標として適切なのか、そしてその数値が成果として望ましい値になっているかどうか、というところが問題になります。

- 効果的な授業の設計と実施
- 学生が確かに学んでいるという証拠
- 達成目標や水準が妥当であり、学生が知識・技術を身に付けている度合いを測れる試験やレポートの設計

この 3 つが、それぞれの授業で保証されていなければ、信州大学における成績の信ぴょう性は下がります。この部分を、シラバス点検やアンケート結果を使いながら、教員レベルでも部局レベルでも確かめることになります。

学生が努力して学べば、それが確実に成果として成績に反映されます。提出した課題がフィードバックされれば、自身の力として自信を得ることができ、自己効力感につながります。その学びへの手ごたえは、成績と、授業アンケートの「授業外学習時間」「到達度」「達成感」の数値によって示されます。教員が良い授業を設計し、実施したことも、学生の成績と授業アンケートの「授業外学習時間」「到達度」「達成感」の数値によって証明されることになります。

【新たな取り組み】

信州大学の質保証の考え方は、これまで信州大学が目指してきたものと基本的に何ら変わるところはありません。これに加えて、新しい取り組みとなるのは、その方針に基づいて、部局単位で行われる「授業間調整」です。この作業は、カリキュラム内におけるそれぞれの科目同士の関連や、それぞれの達成目標の確認であり、具体的には、部局全体としてシラバスと成績を点検するというものになります。

個々の授業における学びがより効果的になるために、部局は、カリキュラムのデザインや、個々の科目の順番、また授業規模や運営形式などを検討します。効果のある学びが、継続して組織的に運営されるように、取り組むことになります。

【参考資料】

【教育課程編成・実施の方針】

1. 信州大学は、学位授与の方針を達成するためのカリキュラムを体系的に編成します。
2. 信州大学は、学位授与の方針に基づいて授業の目標を設定します。
3. 信州大学は、授業目標を学生が適正な学修を通じて達成できるように授業をデザインし、実施します。
4. 信州大学は、授業において、授業目標への到達度で成績評価します。

信州大学で学び、研究する我々は、その成果を人々の幸福に役立て、人々を傷つけるためには使いません。

教育目標

かけがえのない自然を愛し、人類文化・思想の多様性を受容し、豊かなコミュニケーション能力を持つ教養人であり、自ら具体的な課題を見出しその解決に果敢に挑戦する精神と高度の専門知識・能力を備えた個性を育てます。

【学位授与の方針（改定案）】

信州大学の理念と教育目標に基づき、学士課程において、次の方針に従って学位を授与します。

1. 各学部の教育理念により設定された教育課程において、基準となる単位を修得し、かつ学部が定める審査に合格している。
2. 次に掲げる各項の能力を有している。
 - ① 学士の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力
 - ② 的確に情報を収集し、理解し、発信する力
 - ③ 持続可能な社会を実現するための課題に取り組む力

【添付資料】

- ・信州大学 教育の質保証概念図
- ・信州大学 教育の質保証概念図の解説